大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

太田義弘教授退任記念号によせて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 里見, 賢治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/6778

太田義弘教授 近影

太田義弘教授退任記念号によせて

太田義弘先生は、大阪府立大学教員停年規定により本年(1998年)3月末をもって本学部を退任されることとなった。いつかは迎えなければならないやむを得ないこととはいえ、現実にその時の近づきつつある今日になると、先生の存在の大きさに改めて気付き、その先生をお送りしなければならないことにたじろぎを覚えざるをえない。

先生は、関西学院大学文学部社会事業学科をご卒業後、同大学大学院文学研究科修士課程に進まれ、その在学中に文学部助手補、修士課程修了と同時に社会学部助手にご就任になり、その後今日に至るまでの39年間の教育・研究生活のスタートを切られた。その後先生は、1965（昭和40）年に北星学園大学文学部に転じられ、1989（平成元）年3月に退任されるまでの24年間、北海道の地で社会福祉学の教育・研究に携わられ、多くの優秀な学生を育てるとともに、ご専門の社会福祉方法論研究、ソーシャル・ワーク実践過程研究の分野で顕著な業績を重ね、その道の第一人者の地位を固められた。先生が育てられた学生の幾人かは、卒業後何年かを経てから、後で述べるように先生が中心となって開設された本学の大学院社会福祉学研究科博士課程に進学したが、これなども先生の影響力の大きさを示すエピソードの一つといえよう。

先生はその間、北星学園大学で学生部長（1981年11月～1984年3月）、ついで文学部長（1986年4月～1988年3月）の要職に就かれ、大学行政の面でも手腕を発揮された。

先生を大阪府立大学にお迎えしたのは、1989年4月のことであった。今日の時点から振り返ってみると、先生の着任された頃が、社会福祉学部にとって一つの転換点であったと思われ、太田先生をはじめ3人の新任教授の着任は、学部の新しい時代の幕開けの象徴であった。そしてそれは、右田紀久恵学部長（当時）のリーダーシップの下で、念願の大学院社会福祉学研究科修士課程の設置（1991年4月）に結実することになった。

ところで、太田先生が北星学園大学から本学部に転じられた直接の動機は、もともとご出身が関西であったという事情に加えて、新しい任地で大学行政から解放されて、落ち着いて研究に専念したいという点に恐らくあったことと推察している。だが、先生のこの期待は、まことに申し訳ないことではあったが、

必ずしも実現できないこととなった。というのは、先生には、早くも1990（平成２）年８月から、社会福祉学部選出の大阪府立大学評議員として、さらに翌年の1991年８月からは社会福祉学部長・社会福祉学研究科長として大学・学部行政の中枢を担っていただくことになったからである。以来昨年７月までの３期６年間にわたって学部長としてご尽力いただくことになった。考えてみると、先生が本学に在籍された９年間のうち７年間を管理職として過ごされた訳で、研究への専念を希望されていたであろう先生としては、まるで詐欺にあったかのように感じられたのではないかとまことに申し訳なく思う。

だが、学部として幸いであったのは、先生の学部長・研究科長ご在任中に、社会福祉学部は学部として標準的に完成に至ったことである。とくに重要であったのは、1993（平成５）年４月に大学院社会福祉学研究科博士後期課程の開設が実現したことである。当時は日本では社会福祉学研究科として博士課程をもつ大学は皆無であったため、国公私立大学を通じて最初の博士課程として注目されることとなった。いまでも国公立大学では唯一の存在であり、本学部の果たすべき役割の大きさを改めて自覚するところである。他にも先生の学部長ご在職中には、博士課程社会人入学制度（1995年度）・学部定員増（1995年度）・学部社会人入学制度（1997年度）などの実現があり、さらに先生の学部長時代に教授会の議論を経て企画された障害者学生特別選抜制度も、その後ようやく全学的な調整を終え、1999（平成11）年度から受け入れを開始すべく準備が進んでいるところである。

このように振り返ってみると、本学部にとって先生の存在がいかに大きなものであったかに改めて気付き、先生のご計画を狂わせたことをお詫びしつつも、心から感謝する次第である。

先生のご活躍は、大学内部にとどまらない。主なものだけをあげても、日本社会福祉学会理事をはじめ多くの学会の理事を歴任され、また本学部が日本社会事業学校連盟の会長校に選出された際、会長を務められ（1994年から２年間）、現在も副会長であること、1991年以来６年間文部省大学設置審議会大学設置分科会専門委員として、新設予定の社会福祉系大学・学部・学科等の設置審査に尽力されたこと、1991年以来学位授与機構専門委員を務めておられることなど、まさに枚挙に暇がないほどである。

学内外にわたってこれだけの成果をあげるためには、恐らくはかなりの激務

があったであろうと推察されるのだが、先生は淡々と仕事をされていたような印象がある。ご多忙な中でも決して研究を疎かにはされず、私の印象では、いつもは温厚な先生が研究の面では逆に厳しさを示された。先生のご専門は社会福祉方法論研究の分野で、社会福祉方法原論の第一人者でいらっしゃるが、私はその方面は門外漢なのでこの点について語る資格はない。しかし、私のような凡人としては驚くべきことに、そのような超多忙な中でご高著『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』（誠信書房、1992年）をまとめられ、それによって関西学院大学から博士（社会学）の学位を取得（1993年11月）されていることである。自らを厳しく律しつつ、着々と努力を重ねられる先生であってはじめて可能なことといえよう。

先生は、敬虔なクリスチャンで、それに加えて先生の生来の温厚な人格とが合わさって、外面的にも内面的にもジェントルマンという言葉がぴったりとする印象がある。先生がほとんど毎日のように朝早くから夜遅くまで研究室でお仕事をされていることは有名で、その一方テニスを趣味とされ、生活の余裕も大事にされている。先生の退任記念最終講義の際、教職に就かれて以来、病気を理由として講義を休んだことは一度もないとのことを伺い、一見華奢に見える先生の中に秘められた強靭な意志力の一端にふれた思いがした。

このように書きつづれば際限のないことである。先生が築かれ残されたものを引き継いでいく私たちとしては、本学部が創設以来担い固めてきた日本の社会福祉教育・研究を牽引するトップクラスの学部としての地位を今後も維持し、さらに研究面での求心力を強めつつ発展させていくことが、先生のご功績に報いる最善の道であろうと考えている。それを私たち社会福祉学部教員集団の今後の課題として、同僚諸兄姉の協力をえながら、微力ながらも邁進したい。

先生には、本学部ご退任後龍谷大学社会学部教授としてさらに研究を発展させるご計画と伺っている。サミュエル・ウルマンの「青春の詞」をひくまでもなく、いつまでも若々しい先生のご健康といっそうのご活躍を祈念しつつ、私たち一人ひとりの万感の思いを含め、この記念号を先生に捧げる次第である。

1998（平成10）年1月24日

大阪府立大学社会問題研究会長
（社会福祉学部長）
里　見　賢　治